



No.77 2005. 9
 (株)よかネット

NETWORK

全国のまちづくり活動家たちの自慢の場・たまり場ができた
 ——全国まちづくり大会交流記—— 2

全国の“まちづくりびと”との交流
 全国まちづくり大会はネットワーク社会の騒動現場
 ——人が一度顔を合わせるために、メールが何回必要か——

安心院は日本人の”帰って行く場・ふるさと”を目指す 6
 農家民泊での発見
 安心院の魅力は人の魅力

景観なんでも相談サロン始めました
 ——景観をテーマにした異業種ネットワークづくりを目指して—— 9

見・聞・食

米蔵を改修し、「食」と
 「交流・文化活動」の拠点施設とした「高瀬蔵」 11

リレー形式で米蔵を巡る米米惣門ツアーに参加しました 12

まち歩き

明太子づくり体験と板付遺跡見学
 ——第4回福岡・博多まちあそびの会—— 13

近 況

パソコン災難に、福岡一大連
 国際ソフト化サービス化システムが大活躍 14

就農準備校で野菜づくりとネットワークづくり 16

●全国まちづくり大会で、九州の魅力を大いに宣伝

8月6日、7日に、全国都市再生まちづくり会議が新宿の工学院大学と日比谷公会堂で行われました。九州北部からは、福岡や長崎の西海市、筑後川周辺地域などをフィールドにまちづくり活動をしている人たちが集まり、パネルと焼酎で、全国各地の参加者たちと交流しました。



写真①：1日屋台となった工学院大学
 写真②：2日目の日比谷大会の様子
 写真③：筑後川まるごとネット博物館
 ・実況中
 写真④：太宰府水城について説明
 写真⑤：北原白秋の映像と柳川堀割

全国のまちづくり活動家たちの自慢の場・たまり場ができた

全国まちづくり大会交流記

本田 正明、雪丸 久徳、糸乗 貞喜

全国都市再生まちづくり会議が、新宿の工学院大学と日比谷公会堂で8月6・7日の両日に渡って行われた。この会議のホームページをみると、「全国各地のまちづくり活動の要に在るリーダーたちが、互いに横につながり、連携し、情報の交換、人材の交流をすることにより、将来、日本各地のまちづくりがより一層、活性化するものと考え、ここに『全国都市再生まちづくり会議』の設立をいたしました」と書いてある。まちづくり、地域づくり組織の全国ネットワークをつくらうというのが、この会議の主旨なのだが、“まちづくり”という言葉がこれだけ世間にあふれていながら、全国的なネットワークや集会がなかったことに、かえって意外な感じを受けた。

主催者は“17人衆”と呼ばれる全国各地の草の根まちづくりの活動家たちである。所属組織の名称だけを見ても、「日本冒険遊び場づくり協会」、「路面電車と都市の未来を考える会」、「はかた夢松原の会」など非常に多岐の分野に渡っている。まちづくりは本当に幅が広い。これだけの人たちがよく集まったと思う。

さらに、公的機関の補助はいっさいなく、民間資金だけで2日間の大会をやっているというのだから、本当に驚いてしまう。この会議の主旨に賛同したまちづくり関係者たちが、手弁当で全国各地から集まっているのである。初日の全国まちづ

くり展には700人ほど、2日目の日比谷大会には1500人ほどが集まった。

「まち活動屋台」を新宿のど真ん中で開催
会議初日（8月6日）は、新宿のど真ん中にある工学院大学の一階アトリウムでの“まち活動屋台村”と、大学内の講義室を使って9つのまちづくりテーマによる“まちづくり交流会”が行われた。私の中では、屋台村の方が交流会というイメージを持っていたので、主にまちづくり活動のプレゼンを行う“まちづくり交流会”となんとも混同して回りの人に迷惑をかけてしまった。

工学院大学の立地場所はほんとうにいい。便利とは聞いていたが、東京都庁の目と鼻の先にあるとは知らなかった。ビルに入ってすぐがアトリウムになっており、そのステージには屋根瓦付きの屋台がすでにセットしてある。このセットだけでもお祭りの縁日のな雰囲気が出てきて“屋台村”という感じがする。70近くの団体がブースを出しているの、11時の開場前からかなりの人であふれている。九州のメンバーが出しているブースでは、早くも試飲用の焼酎までがスタンバイされていた。

屋台にはお酒が欠かせない

まちづくりに興味関心の高い人ばかり集まっているためか、パネルを見ている人にちょっと話しかけると、ぼんぼん質問が飛んでくる。「ウメク



全国まちづくり大会のパンフレット



初日の屋台村の会場(工学院大学)の様子



屋台で焼酎を飲みながら、名刺交換も

「リ植えてハワイに行こう」のキャッチコピーで有名な大山町（現日田市）の梅リキュールやらっきょうの漬け物も筑後川流域の産品なので、と試食試飲を進めると、最初はとまどいながらも「飲みやすくとてもおいしい」などと非常に反応がよかった。他地域のブースをあまり見て回る時間がなかったので、全体がどういう雰囲気だったのかはよくわからなかったが、事務局スタッフが九州ブースを見に来たときに、「九州グループはすごい！」としきりにいていたので、かなり印象が良かったようである。

ただ、九州グループは焼酎などのお酒類を大量に持ち込んで勝手に盛り上がり、屋台村ブースの優良活動の投票をすっかり忘れていたようで、1団体しかノミネートされなかった。

新宿と小鹿田をつなぐインターネット博物館実験も開催

新宿会場と小鹿田（大分県日田市）をインターネットで結び、唐臼の風景や音をリアルタイムでつなぐインターネット博物館の実験も行った。パソコンの画面が小さいので、なかなか何をしているのかなかなか気づいてもらえなかったのだが、「唐臼の今の風景が見れますよ」と説明をすると、かなりの人が興味深く覗いてくれていた。初めての試みだったので、回線が途絶えたりするトラブルもあったが、小鹿田では窯元の主人や若手の人たちが興味を持って来てくれたり、ネット上でも多くの人が見てくれていたようである。新宿側も焼酎片手に画面を覗いたりしていたのだが、小鹿田と新宿とのつなぎ役をするはずだった人が忙しすぎて、現場にほとんどいなかったため、交流が身近な人に限られたのが少し残念だった。この実験は、10月5日の14:00～17:00頃に朝倉三連



九州からは、筑後川、柳川、水城の活動報告を行った

水車で再度実験を行う予定なので、興味ある人はサイト（<http://kyushu.main.jp/>）を覗いてみてほしい。

まちづくり交流会はまじめな勉強会・研究会の雰囲気

ワイワイガヤガヤした屋台村会場から8階の交流会会場に移ると、こちらは打って変わって静かだった。どのテーマ会場でもまちづくり団体のプレゼンテーションを真剣に聞いている。酒気帯びの私が参加するには、ちょっと抵抗を感じるくらいである。会場によっては、プレゼン時間をできるだけ長くとり、プレゼンは短めにして参加者との議論を行うところ、講義形式で話をまとめているところなど、さまざまだ。

九州のまちづくり団体は、まちなみ景観というテーマに集まっていたのだが、「柳川の掘割再生の取り組み」や「水城を空から眺めた」というような具体的な取り組みの報告に対して、参加者の関心が高く、会場からの質問も多かった。

小泉首相も激励に訪れたシンポジウム

二日目（8月7日）は、会場を日比谷公会堂に移してのシンポジウムである。この日の内容は、共同通信など多くのメディアで報道されているので、その主なところを紹介する（報道文を引用）。

第一部では、前日に行われた「全国まちづくり展」参加優良活動の表彰式を実施。グランプリは、くしろ橋南西ゆめこい倶楽部、（社）全日本瓦工事業連盟・全国陶器瓦工業組合連合会・全国いぶし瓦組合連合会の2団体が受賞した。

第二部には来賓として小泉純一郎首相が出席。「全国の人たちが街づくりをしようという姿を見てうれしく思う。民間の力でやっていくことがこれからの時代に必要だ」と参加者を激励し

た。その後行われたシンポジウム「誰もが主役、頑張らないけど諦めない街づくり」では、全国から集まった5人のパネリストが、街づくりのやりがいや課題、今後の抱負について語り合った。同会議は来年度以降も継続して行っていく予定だ。

今回は、ブースを出している九州グループのサポートスタッフということだったので、会議全体の雰囲気はよくわからなかったのだが、まちづくりに情熱を燃やすという同じニオイを持つ人たちが全国にいるのだということが実感できたことが収穫である。来年度も開催されるということなので、今度はぜひ自分のテーマとつながる人たちと知り合えればと思う。（ほんだ まさあき）

全国の“まちづくりびと”との交流

昼間からお祭り騒ぎな九州ブース

ポスターセッション 新宿屋台村 で、私は、太宰府の水城をテーマに、活動資料やそのときに作って食べた古代食を販売。「九州にも万里の長城があった！！1300年前の巨大な水城」と目立つキャッチコピーをかざして、昨年の都市再生モデル調査事業で実施した「空から見る会」や「歩く会」など、5回のセミナーの展示をした。パネルの下の長机には、古代食の弁当と古代のチーズ「蘇」（新鮮な牛乳を100 以下の温度でゆっくり水分をとり固めたもの）も並べた。まわりでは、全国各地から集まったまちづくり人が、それぞれの活動について説明していた。ゆっくり見て回るほどの時間はなかったが、どこのブースも活気があることは十分伝わってきた。九州の展示ブースでは、焼酎や柳川のワインの試飲のコーナーがあったため、他より若干テンションが高く、昼間からお祭り騒ぎといった感じであった。

水城の知名度は低い

私は、水城についての展示パネルの説明したが、水城に関してはほとんどの人が知らない様子で、太宰府にあると説明すると、太宰府天満宮なら知っているが との答えが多かった。天満宮は全国的に知られているが、水城は全然知られていないのだと実感した。しかし、なかには、太宰府は歴史のある土地だから昔から好きで移住を考えたことがあるという人もいた。もちろん水城のこと



注目が集まった古代の食べ物「蘇」

も知っていて、太宰府とその周辺地域を含めて、活動を盛り上げて欲しいとの言葉を頂いた。

古代食弁当、古代のチーズ「蘇」は味も話題としてもなかなかの評判

私が展示パネルの説明をしている間に、準備した古代食弁当20セット（1000円）は即完売したようで、持ち場を変ったときには「蘇」（400円）しか残っていなかった。今回販売した古代食弁当も「蘇」も「水城を歩いて古代食を食べよう会」の時に昼食として食べたもので、今回も太宰府市内の仕出し屋につくって頂いた。

「蘇」は、100個用意したうち80個くらいは売れた。話のネタとして買っていった人が多いのではと思っていたのだが、その通りだった。後日、インターネット上のブログサイト（公開日記）を見ると、3人が「蘇」の話題を取り上げており、味についても高く評価していた。

美味しい焼酎はストレートかロックが人気

古代食の他に、九州の美味しい焼酎を全国の皆さんに味わってもらおうと、酒造から取り寄せて、一杯100円で販売してみた。水で薄めてくれという人が多く、中にはお茶で割る人もいた。しかし、私たちがロックかストレートを勧めると、最後には何杯もおかわりをする人もいた。口コミで広がったのか、ロックかストレートで飲む人がどんどん増え、持って行った焼酎はあっという間になくなった。特に、瓶ごとに度数が手書きで書かれている珍しい焼酎などは、お話しになるので人気が高かった。

輪になって阿波踊りで会場一周

全国のまちづくりびとは皆いい顔をしていた。会場では、音楽演奏あり、ハワイアンダンス？あ



最後はみんなで阿波踊り

りで終始、祭りのような雰囲気、「だむだん連」という踊り連が入り、みんなが踊り出したときに最高潮に達した。あちこちで交流の輪ができていて、まちづくり人の自慢話が飛び交っていた。最後には阿波踊りの踊り方を習って、みんなで輪になって、わいわい踊った。

今回は、展示パネルを説明したり、焼酎や古代食の販売で最後までバタバタして、全てのブースを見て回れなかったのが残念だったが、新たな出会いがあり、交流ができた。今回の新宿屋台村を通じて、全国の方々に元気をもらった気がする。同時に積極的に現場に入ってまちづくりを実践することが大事だということを実感した。

(ゆきまる ひさのり)

全国まちづくり大会は ネットワーク社会の騒動現場

- 人が一度顔を合わせるために、
メールが何回必要か -

「糸乗さん、こんなにあちこちの役割に名前が出ていてもやれるんですか」「なぜ私の名前が書かれているんですか」「あなたの担当なんですよ。メールで連絡が行ってますよ」

電話でキツク注意されて、メール社会というものへの到来に対して、やっと覚悟を決めた。メール社会というものでは、メールを送っておけば一応確認したことになるらしい。メールがいっぱい来て、それに「添付」という表がたくさん付いてきて、きちっと意思表示をしないと、それが決まりになっていくのである。メールで怒鳴られ、メールで諭され、メールで小突かれながら、メール族

に取り込まれてしまった。

そもそも、日本都市計画家協会（jsurp）が、「全マチ大会」をやる気になったのは去年の暮れのことだったし、今年の2月には「連絡はメールで」ということの連絡メールが来ていた。メモを繰って見ると、2月末には全マチ準備会議ができていた。ご丁寧に、4月には返信書面と返信用封筒が来ている。以後膨大なメールが来て、一週間に一度ぐらいしか見なかったメールを、毎日見るように習慣づけられてしまった

とはいえ私には、メール連絡だけで（もちろん全マチ準備会議は毎月あり、委員の半数ぐらいは出席していた）、「新宿交流会に700人、日比谷大会に1500人」を集める行事ができるということのリアリティがなかった。東京のメンバーは自分の商売をほっぽり出して、没頭していたわけだが。

私が、やっとその気になりだしたのは、冒頭の見出しに書いた「あなたの担当なんですよ」からである。サボったというわけではなく、4月と5月に福岡・柳川で、私が責任者になっている行事を行っていたからである。とにかく6月になったら「メールで小突かれ」「メールに追い回され」おどおど後ろからついて行くことになった。私のような昔人間は、2000人余の人々が集うことになる“メール劇場”を、舞台の袖から眺めていて、「すげえ世の中だな」と思いながら、メールの効用に洗脳されていた。

6月以降は、私もその気になりだしたが、それにもまして全マチの事務局メンバーの迫力はすごかった。1～3月頃「jsurpの実力は5～600人かな」などといった頃から見ると雲泥の差である。まちづくりに関わっている個人の集まりにすぎないわれわれの判断としては無理からぬところであろう。私も1000人以上という目標に、リアリティを感じなかった。

新宿・工学院大学の交流会、屋台村……

日比谷のまちづくり大会ともに大盛況

新宿の交流会では、私たちは“水城をテーマにした活動”、“柳川の掘割再生の物語”、“筑後川流域まるごと博物館”の報告をし、屋台村では3テーマ以外にも“西海市のまちづくり”、“博多夢松原の会”、“黒川温泉の景観づくりの活動”、“福岡・博多まちあそびの会”が展示をしたり、弁当や蘇、焼酎を売ったりした。1300年前

の古代食弁当や古代の醍醐味蘇はよく売れた。本当の旨い焼酎を知らない東京の人たちには、九州の本格焼酎が大人気だった。

メール社会という意味の、二つの側面を考えてしまった

700人と1500人が集まるために、どれくらいの数のメールが飛び交ったのか気になる。よく使われる話だが、「電話が普及したら、いちいち会わなくても用が果たせる」という話があったらしいが、結果は「ちょっとあって話そうか、メシ食おうか」という電話をかける人が増えた、といわれている。

しかし電話とメールは違う。

- ・電話：リアルタイム、一々対応、双方向、感情移入的、有料、“情”報
- ・メール：時差通信、一々対応・多数対応、片方向、機能的、無料、連絡

1980年以前だったかと思うが、大阪でNEC小林社長の「コミュニティーアンドコミュニケーション社会」の話聞いたことがある。聞きながら、“情”はどうなるのかと思っていた。つまり、コ

ンピューター社会とは、データの「大量蓄積、大量解析、大量通信」だけなのかも知れん、と不安を感じていたのである。

今回の全マチ大会は、顔を合わせることが目的で、メールはそれを段取りし、旨く会えるようにする道具だった。その間に、メール連絡道連れ多数自殺や、呼び出し殺人の話が新聞に載った。電話ではこんなことは成しえない。メールの二面性ということになると次のようなことが考えられる。

- ・メールの先に“情”の交流がある場合
- ・メールがプライベートな顔をして、多数に事務的連絡をする場合

手紙では、多数に事務的に自殺を呼びかけることはあり得ない。必ず“情死”になる。メールを有料にすると（たとえばメール一回あたり一円の、福祉財源税をかける）、変なメールが減るのではないか。

訳の分からんことを書いてきたが、今後私も人もうけ・出会いを増やすためのメールに取り組んでみたいと思っている。（いとのり さだよし）

安心院は日本人の"帰って行く場・ふるさと"を目指す

糸乗 貞喜、山口 ひろこ、本田 正明

安心院の農泊は、「帰ってきたよ」と言って訪れる人が多い、と聞かされた。

今回一緒に行った私たちのメンバーは、一応インターネットの検索を見て「民宿だからタオルと歯ブラシは持って行くように」といわれていた程度で、予備知識はなかった。「くつろぐのだから、行ったらすぐビールを飲もう。ビールとつまみを買っとかなくちゃ」などといって、途中のスーパーで少々仕入れていた。

午後3時半頃着いて、缶ビールを取り出したら、すぐにいろいろな野菜のみそ漬け、粕漬けなどに野菜や魚の煮物が出てきた。こうなるとスーパーで買ったつまみなど恥ずかしくて出せない。完全に、久しぶりに帰ってきた“我が家の囲炉裏端”である。

ここで、延々と何時間も話を聞いた。

「なんで始めたんですか」「町長がえらかった。

表に出る人ではないけど」

「儲かっていますか」「人もうけになりますし、お金も」

「初期投資はしないんですから。今のままがいいとお客さんに教えられて」

「今では日本中から講演に呼ばれたりして、ソロオソロシイことになっています」と言って、ネットに出ている話を聞いた。

この話を聞きながら、余暇活動に対する私たちのニードについて考えてみた。その分類を次頁の表に書いている。

今後、知的労働が増えて行く中で、人々が求める余暇活動に対するニードのかなりの部分（たとえば10～20%）が、Cタイプになっていくだろう。そのことは、労働形態と、すでに現れているニードからも読み取ることができる。

（いとのり さだよし）

Aタイプ 人並み欲求

ヒトと同じものを持ちたい(ブランドとなっているある程度の量産品)
 ヒトと同じになれたら気分が晴れる
 ・同じところに行きたい(ブランド化している、テレビなどで放送されている、かなりの数のヒトがいけるところ)
 ・同じものを食べたい(有名な店で、格好がよいとされているレストランなど)
 有名、ブランド、高級量産品

たとえば

- ・マリノアシティ
- ・マリンワールド
- ・ハウステンボス
- ・ホークスタウン
- ・阿蘇ファームビレッジ
- ・湯布院
- ・大型有名ホテル・旅館

Bタイプ くつろぐ

心を休める 体も休める
 ・人並みでなく、自分のくつろぎ
 有名でなくてもよい 高品質な環境
 ・黒川温泉
 ・湯布院(少し前までの)
 ・中・小型の旅館・レストラン

Cタイプ 安心できる

帰って行くところ
 ・心を休める場
 ・体は動かす
 低価格高品質
 ・心が安まるどころ
 ・安心院の農泊・グリーンツーリズム
 ・有名でも高級でもない

農家民泊での発見

“おひとりさま”を楽しみながら負け犬道を極めてきた(オニババ化はしていないと思うが)私は、仕事柄、宿泊する旅館やホテルの仕様、サービスについてはランキング評価ができるほどのうまいほうだ。その私が、実は、今回の安心院で農家民泊を体験するまでは、グリーンツーリズムが注目される理由の多くは、田舎暮らしへの憧れを持つ人が増えたのだろう程度の認識しかなかったのだ。

道に迷いながらやっと舟板に到着すると、中山ミヤ子さんが出迎えてくれ家のほうに案内された。家の中に入って意外だったのは、普通の中山さん宅の暮らしがそのまま、ちょっと雑然とした雰囲気なのである。おばあちゃんに「散らかっているけどまあおあがり」といわれ家に上がり込ん



行ったのが午後3時半、しゃべって、聞いて、飲んで、食べて、途中畑に行って、風呂に入って、11時半まで楽しんだ基地が、この囲炉裏ばた。"舟板昔ばなしの家"



朝もまた囲炉裏ばたで



竈で炊いたトリと山菜のまぜめしをいただいた



こんな普通の農家です

だという感じだ。宿に泊まりに来たのではないのだとその瞬間思った。泊まる部屋である2階に荷物を置き、中山家の五右衛門風呂や竈をみせてもらい、1階のダイニングである囲炉裏端に8人が座った。

夕食までしばらく時間があつたので台所にお母さんの中山ミヤ子さん（お母さんと呼ばせて頂く）が手際よく私たちに食べ物をだしてくれる。家事はお母さんひとりが全部仕切っている。大変そう。座って1時間後、皆の会話もはずみながらも気が付くと私の手はせわしなくうどんをこねていた。

私たち8人はお母さんにとって子どもや孫といっしょ。「ハイこれして」「はいこれこねて」お母さんは、実に人の動かし方がうまい。気が付くと8人それぞれが夕食準備の分担していた。3時間後には私は中山家の客ではなく親戚の気分になっていた。久しぶりの楽しいリラックスした気持ち。夕食後に五右衛門風呂に入ったときは、子どもの頃によく行ってた私の田舎（父の生まれ故郷）に帰った気分になった。夜は長く話は延々と。サービス業としての宿ではなく家族の一員として迎えられるような体験が農家民泊の魅力だったとは。

特に都会生活にどっぷりと首まで浸かったわたしなど、中山さんとの出会いは大きい。多分、私はまもなく再び誰かを連れて安心院に中山さんに会いに行くだろう。

自分の居場所は3つは必要だ。家と仕事場と自分の田舎（ふるさと）と。一番暖かいのはもしかすると中山さん宅なのかもしれない。本当の家族関係はそれぞれの暮らしがある。中山さんとは家族の枠を越えてきっとこれから交流が始まるに違いない。

（イゴス環境・色彩研究所 山口ひろこ）

安心院の魅力は人の魅力

安心院というところは、名前は有名なのだが、いざ行って見ようとなると優先順位が低くなるころのようだ。私が安心院に行ったことを話すと、「有名だけど、行っても何も見るところがないですよ」と何人かの友人に言われた。

確かに安心院にドライブにいっても、普通の農村風景が広がっているだけで、特段感動する風景にお目にかかれるわけではない。それでも安心院



五右衛門風呂は自分で沸かす



五右衛門風呂は底板(右の小さい丸板)が浮いてくる



うどん打ち体験



夕・朝食のための野菜を取りに行く

ってすごいところだなあと感じてしまうのは、安心院に住んでいる人の魅力なのだと思う。もっと言えば、都市住民が農家になった気分で、田舎の生活をまるごと体験できるというのが、ウリになっている。それを商売っぽくなく、普通の生活スタイルのままで、さらりと提供しているところが本当にすごい。初対面なのに、畑で採れた野菜のつけものをぼりぼり食べながらおしゃべりしたり、「五右衛門風呂を沸かしてきて」などと頼まれたりすると、本当に家族の一員のような気分になってくる。

この安心院のよさというのは、壺にはまる人とそうでない人との差が激しいようだ。黒川温泉に行ったことを話すとほとんどの人が「いいところよね」とか「うらやましい」といった反応を示すのに、安心院の話をする、言葉には出さないが、「ふーん、やっぱりお前は変わったことが好きだなあ」という顔をする人が多い。同世代の友人で、共感してくれる人はなかなかいない。

また、今回一緒に農泊した他の人たちとも私の感覚は違って、みんなが安心院にノスタルジーを感じているのに、私一人は東京ディズニーランドに初めていったときのように新鮮な印象を受けた。

それは、私がじいちゃんの世代から農業と縁が切れているサラリーマン系国内移住民族の3代目なので、田舎暮らしの原体験がまったくないというのが大きく影響しているのだと思う。つまり、安心院というところは私にとって“憧れ”の世界だったわけである。友人の中にも私ほど田舎と縁がなくなって、根無し草になっている人もいないので、もしかしたら、「お前は農業の大変さもよく知らないから、そんなのん気でいられるのだ」と思われているのかもしれない。

しかし安心院の農泊体験のおかげで、私の中で虚像だった田園楽住が、だんだんリアリティーを感じられるようになってきた。3世代も前に、田舎から離れているので、田舎暮らしになじむまでは相当の苦勞があるかもしれないが、農家のおばちゃんたちの笑顔を思い出すたびに、そんな顔があふれるコミュニティに参加したい、つくりたいと思うようになった。憧れが目標になりつつある。

(ほんだ まさあき)

景観なんでも相談サロン始めました

- 景観をテーマにした異業種

ネットワークづくりを目指して -

本田 正明

“景観”という言葉は、まちづくりに関わっているといろんなところで耳にする。ただ、よく話をよく聞いてみると、同じ景観という言葉を使っている、色のことであったり、ランドスケープであったり、建物の統一性であったりと、人によってはだいぶ違う意味で言葉を使っていると感じていた。

景観をテーマにネットワークをつくりたい

まちづくり活動をしている人、景観に関わるさまざまな専門家などが集まり、「なるほど、同じ景観という言葉を使っている、考えていることはこんなに違うのか!」という気づきの場、樹木や色といった自分とは異なる視点で景観を考える人たちとのネットワークづくりをしようと、九大で景観研究をしている高尾さんと、カラーテクノロジー研究所の谷口さんと私の3人でこの会を始めた。

それぞれの専門分野で景観をとらえると、どうしてもパーツの話になってしまうので、サロンを通じて地域の風景や風土といった全体像で“景観”を考えていければと思っている。

第1回目のサロンでは、「住民参加型景観デザイン・まちづくり」などを研究している福岡大学の柴田久氏に話をさせていただいた。最初は少人数でも交流できればいい、ぐらゐの感覚だったのだが、思いのほか反響が大きく、20人近くの参加があった。以下ではその概要を紹介する。

柴田先生の景観についての話

私が景観を見るときポイントとして4つ考えています。1つ目は、景観はやっぱり見た目ということ。道路の舗装とか表の部分を“表層”といいます。そこだけをいじるのではなく、地形や歴史といった“らしさ”が文脈を持って入っているかが重要だと思います。

2つ目は、街路計画では街路ばかり考えますが、本当は街路だけがあるわけではありません。地域の中でどういう風におさまるかということが大事です。パンフレットのデザインにしても、大切

なのは余白のデザインだと思います。街路も公園にしても、建築物と建築物の“間”のデザインだと思います。特に土木は背景となるもの（社会基盤）をつくる仕事だと思います。

3つ目は、石橋などの土木遺産は長い時を経ることでよくなります。“エイジング”というのですが、長期間の空間の変容が取り込まれているものがいなと思います。時間帯や季節、天候によってかわる状況を景観デザインに取り込んでいるものもいと思います。

4つ目は、人の生活が積み重なって風景です。これについては私が良い風景、悪い風景と思う実例を示しながら話したいと思います。まず、失敗例。駅前歩道の整備で、樹木を植えているのですが、それによって弘法大師が修行したといわれる五岳山というランドマークが見えにくくなっています。駅はまちの玄関なので、地域らしさを活かさないといけないと思います。次は良い例で、高松市の北浜にある港の倉庫街がカフェになって人が集まっているのですが、この入り口には土嚢が積んであります。住民の人から撤去してくれという意見もあったそうですが、土嚢は高潮対策としてこの地域特有の景観要素だと思います。広島市の太田川の護岸では、石の間をコンクリートで埋めなかったのが、草が生えて良い景観になっています。逆に七城町のメロンドームは、非常に精巧なメロンの形をした建物のインパクトが強すぎて、田園風景もきれいなところなのですが、それを見えにくくしています。

景観を考えるプロセスの中で“住民参加”ということが言われますが、私がこういう仕事に関わり始めてからずいぶん浸透してきたと思います。しかし、なぜ住民参加が必要なのかという議論を飛ばしてしまって、「住民は参加するものだ」というのはどうかと思います。昔の集落の中には、水路を中心として、上流の人は野菜しか洗わないで、下流の人は靴を洗ったりするといったようなルールをつくるなど、水がコミュニケーションのきっかけとしたコミュニティがあります。そういう住民参加、コミュニティデザインというものを考えたいと思っています。

私は住民参加をしたと言うアリバイを残すようなデザインではなく、そこをたまたま訪れた人も居心地が良い空間をつくるのが大事だと思います



景観サロンのブログサイト

す。ただ、地域の人が愛着を持つものを何か形に残すためにも、専門家の役割は大きいと思います。【意見交換】

- ・色彩を切り口にしたまちづくりや景観の仕事をしているが、土木の景観というものに対して偏見があって、美しいと思うものが違うのではないかと感じていたが、地形を読み取るということが似ていると思った。
- ・先日ソウルのチョンゲチョン復元プロジェクトを見に行ってきた。都市高速のような高架橋をとっばらって、川を復元する事業だった。そのチョンゲチョン沿道に残る昔ながらの市場も再開発で作り替えてしまおうとしている。そこにいる人々がそれぞれもっている記憶や思い出を大切にしたい進め方が大事だと思う。
- ・児ノ口公園や柳川のように地域の人々が主体的に活動して、その結果街の不動産価値が上がっている例がでてきている。そういう儲かる景観についても考える必要があると思う。
- ・行政は多くの人に伝えるようにしようと思っていないといけない。ワークショップに参加した人たちが地域に帰って、地域に伝える。そこで出た意見をデザインに反映させることが重要だと思う。このプロセスが大事だと思う。
- ・景観には施設と土木と風景と3つの種類の話がある。河川にしても道路しても土木は基準が厳しすぎるように思う。
- ・宮崎県の景観アセスの話聞いた。ブログでみんなが簡単にかきこめるようにして、意見をまとめている。携帯を使って、いつでもどこでも書き込める。バリアフリーについて不便と感じたときなどにすぐ書き込めるなどメリットが多い。

まちづくり活動をしている人にも呼びかけ
 今回は行政やコンサルタントなど、設計に関わる人が多かったためか、住民参加についての話が多く出ていた。これからはもっとまちづくり活動を実際に行っている人たちにも参加してもらって、現場からの声も聞きながら、議論できればいいなと思っている。

次回は9月28日（水）の6時半から福岡アクロスの久留米大学サテライトオフィスで行うので、興味ある方は本田まで連絡してください。また景観サロンのブログも立ち上げて、児ノ口公園の事例などもアップしているのでご覧ください。

URL <http://lssalon.exblog.jp/>

（ほんだ まさあき）

米蔵を改修し、「食」と「交流・文化活動」の拠点施設とした「高瀬蔵」

山田 龍雄

玉名市でタウンマネージャーをされている岡本真司さんに「高瀬蔵に遊びに来ませんか」とのお誘いを受けたのは、今年の2月であった。当社所主催のゼミに岡本さんもわざわざ玉名から来ていた。メイン講話者の話が終了し、アルコールも入って雑談のときに初めて岡本さんとお話し、この時に玉名に高瀬蔵というものがあり、4月29日にオープンするというのを知った。その後、研修旅行として企画したのであるが、岡本さんの日程がなかなかあわず、結局、小生と所員2名で玉名へ行ったのは7月9日（土曜）と、思い立ってからなんと5ヶ月目のことであった。

元の米蔵を「食」と「交流・文化」の場として再生

「高瀬蔵」とは、JR玉名駅より約2km東側に位置する中心市街地「高瀬町」通りの一角に位置している。元々猿渡家が所有していた米蔵を、平成12年に玉名市に寄贈されたものである。この当時玉名市では中心市街地活性化基本計画を策定しており、この計画の中で「まちの核施設」として位置づけられ、玉名TMO構想、TMO計画の認定を経て改修されたものである。

「高瀬蔵」は元々当地に建っていたものなので、当然、商店街の町並みに溶け込んでいる。高瀬蔵



中庭に差し込む光がやさしく、当時の繁栄が偲ばれる建物

改造のテーマとしては、中心市街地の賑わいづくりと市民の交流・文化活動の場とすることが決まり、賑わいでは「食」をテーマとし、現在「和食処：和音」「インド料理：BISUNU」「喫茶店：さわらび」の3店が入店している。お店の誘致も、できるだけ同じ種類の店が集まらないように岡本さんが走り回って交渉したそう。ちなみに改修の事業費費は中心市街地活性化に関連する補助金や県の地域振興補助金などを導入している、総事業費は約1億1千万（設計監理料込み）である。

また、文化・交流活動の核施設として米蔵を改造したホール（収容人数130～200人）がある。

敷地奥に位置するホール内は、少し改修されているものの舞台の前に柱も残され、昔の米蔵を十分連想させてくれる。

ホールイベントは4つの部会での自主運営

この施設の運営はNPO「高瀬蔵」であるが、実質的な活動組織としては音楽部会 文化部会 まちづくり推進部会 商店会イベント部会の4つの部会があり、各部会が話し合った結果を、毎月第3木曜日に企画運営会議に持ち寄って調整し、ホールでの出し物や施設運営の中身を決めている。

ホールの利用状況を見ると、オープン記念もあって5月はほぼ毎日利用、6月は21日間利用となっていたが、7月は土曜・日曜を中心に12日間使用となっている。朝から使用しているイベントもあるので、1日使用時間を3コマの12時間（午前、



街並みに溶け込んでいる高瀬蔵の玄関口

午後、夕それぞれ4時間を1コマ)とした場合、7月のホール稼働率は25%程度(24コマ/93コマ)のようだ。

7月のイベントの内容としてはNPO法人「高瀬蔵」主催のものが5件、市内の他の団体のものが9件となっており、音楽系のイベントが主流で10件、他は「高瀬マイスタークラブ～夏の郷土料理」「親と子供の釣り学校」「高瀬マイスタークラブ～和ろうそくづくり」「高瀬夜嘶」といった学習系のものとなっている。玉名市では音楽好きな人、音楽活動をしているグループも多いという土壌があり、このことが音楽部会の設立、音楽の自主イベントが多くなっている要因のようだ。他の団体の主催が9件ということは、小規模なホールを使ったイベントニーズがあるということであり、この施設が存在が徐々に知られてくるともっと使用が増えてくるかも知れない。ホールの稼働率を高めるためには、もっと市民にPRし、平日の使用頻度を高めるような工夫が必要のようだ。

「高瀬蔵」の年間維持費(光熱費+事務員1名の人件費)は450万円を予定している。収入としては180名の会員の年会費(正会員3,000円、個人の賛助会員2,000円、法人又は団体賛助会員20,000円)、3件のテナントの家賃(1階5千円/坪、2階3.8千円/坪)、ホール使用料で賄うということになっている。4～6月の3ヶ月間はオープンイベントも多く、ホール稼働率の高かったために80万円の黒字が出たそうだ。しかし、ホール使用も落ち着いてきている状況を見ると、7月以降からの収入が問題になるのであろうと思う。

いろいろインタビューしている中で、玉名市の今後の中心市街地の取り組みとして面白そうだと感じたのを紹介したい。

商店街の周りには空家、空き部屋が残っており、これをどうにか活用できないかとの話があった。そこで、町屋の空き部屋に玉名看護大学の学生さんに同居してもらい、高齢者のお世話もしてもらうようなプロジェクトを看護大学と共同で実施することであった。

今、このプロジェクトが「循環型社会と高齢社会における住宅供給システムの調査」というテーマで全国都市再生モデル調査に採択されており、その調査結果が楽しみである。

(やまだ たつお)

リレー形式で米蔵を巡る米米惣門 ツアーに参加しました

愛甲 美帆

玉名市の高瀬蔵でお話を伺った後、岡本さんより「山鹿におもしろいツアーがありますよ」と教えていただき、お隣の山鹿市の下町惣門会が主催する“米米惣門ツアー”に参加した。

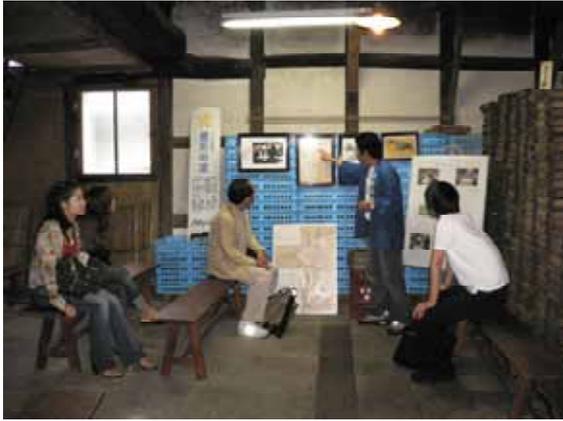
山鹿市は、玉名市から車で30分ほどの距離にある。玉名市と同様に温泉地として知られ、装飾古墳で有名なチブサン古墳や国指定重要文化財で明治時代に建てられた芝居小屋「八千代座」などがある。夏の風物詩、和紙の灯籠を頭にのせてゆったり踊り歩く山鹿灯籠まつりも有名なまちである。

山鹿市には6つのガイドグループがあるようだが、何とも響きが良いこのツアーは、豊前街道の山鹿の番所門『惣門』があった惣門地区の酒蔵、味噌蔵、米蔵と光専寺のお話を聞くツアーとこれに加えて八千代座を見学する2つのコースがある。私達は、前者の方に参加した。

ガイドさんがリレー形式で説明

ツアーは夕方の最後の組で、参加者は、私達3人と若い女性2人組の計5人であった。このツアーは、ガイドさんがリレー形式で説明される。まず、酒蔵『千代の園』で酒造りの工程を聞き昔の道具を見た。最後にお酒を試飲していると「そろそろよろしいですかぁ」と次の見学先であるお隣の味噌蔵、『木屋本店』が迎えに来てくれる。

昔は間口で税金を徴収されていたということで、店先は狭くても奥は長い。ぐんぐんと奥に案内され、ここでひと休みされるのだろうか台所をすぎ、



蔵の中で街並みの話を聞く



惣門地区の街並み

こうじ室の前に通された。まさに職住一体、1階が工場で2階が自宅というつくりであった。

そこでは、古い地図から町割りの話を伺った。

すぐ側を流れる菊池川と町中を結ぶ『惣門』は、外から訪れる人を制限する番所門で、江戸時代はここから船に米を積み、先ほど訪れた玉名市の高瀬蔵を経由して長崎、関門海峡、を通り大阪の堂島まで運んでいたそう。だから米問屋が集積し、次第にお酒など米に関連する商売が行われていたそう。『惣門』は平成15年に復元されている。

また、味噌づくりのための、ふかふかの“こうじ”を見せてもらい、甘酒をいただいた。そして3人目のガイド森田さんにバトンタッチされた。

八千代座を建設した旦那衆

最後は森田さんから、光専寺に案内していただき、旦那衆の話を伺った。光専寺には昔あった旦那衆の自警団『惣門團』の写がある。その時のお話と、「山鹿の絵はがきシリーズ」によると八千代座はこの旦那衆が西南の役の復興の一環として建てたものの1つで、現在の清流荘鹿門亭（当時は鹿門館）で八千代座の株主総会を行った

そう。しかも、この設計も旦那衆である和紙細工の“灯籠づくり”が高じて惣門團の1人が行ったそう。

今、目の前にあるものが繋がっていく面白さ

まちの歴史を現物を見ながら聞き歩くことで、いま自分の目の前にあるものが線でスルスルと繋がっていき、とてもおもしろかった。また、ガイドをしてもらった方たちの、このまちを誇りに思う気持ちが伝わってきて、うらやましくなってしまうほどだった。今回は、時間がなく八千代座をゆっくりみることはできなかったが、また訪れて芝居小屋の中の様子やその他伺ったエピソードのある場所をゆっくり見てみたいと思う。

(あいこう みほ)

明太子づくり体験と板付遺跡見学

- 第4回福岡・博多まちあそびの会 -

原 啓介

第4回まちあそびは、これまでの参加者から明太子づくり体験と板付遺跡見学を組み合わせたコースの提案があり、さらに近くにあるアサヒビール博多工場見学を組み込んだまちあそびを行った。当日は気温33度と、とても暑かったにもかかわらず、87歳のおばあさんを含め、全29名の参加があった。

自分オリジナルの明太子づくりを楽しむ

福岡県の明太子の生産量は全国の約8割を占め、福岡に住んでいる人でなくとも、明太子はご飯の友として馴染みが深い。しかし、意外と明太子の歴史や、作り方を知らない人は多い。自分オリ



マスクと手袋をして明太子づくり



板付遺跡では、弥生館職員の方に解説してもらった



ビール工場では、出来たての生ビールをいただく

ジナルの明太子づくりは、話しのネタになりそう
だということで、「福岡観光会館はかた」の明太
子道場に遊びに行った。

明太子道場では、まず明太子というの名前の由
来や歴史を教えてもらった。

韓国から伝わった。韓国では、スケトウダラの
ことを明太（ミョンデ）というらしく、その卵
（子供）だから、“明太子”という名をあてたら
しい。

一通り説明を聞いた後、キャップとマスク、手
袋をはめて、自分だけの明太子づくりに挑戦した。
たらこにかける酒や唐辛子の量・種類を変えるこ
とで、自分だけの味付けを楽しめる。参加者のほ
とんどが、明太子づくりは初めてで、タラコをつ
け込む酒をブランデーにしたり、ワインにしてみ
たりと、思い思いに味付けを楽しんでいた。レシ
ピを登録してもらえるので、自分の味付けが気
に入れば、オリジナル明太子を追加で注文するこ
とも出来る。

板付遺跡で古代の稲作跡を見る

次に板付遺跡に向かった。板付遺跡は、弥生時
代の環濠集落跡で、竪穴式住居や水田、共同墓地

跡などが発掘されている。特に、竪穴式住居や貯
蔵庫跡は復元されており、中に入ることも出来る。
また、板付遺跡のすぐ横にある展示館、弥生館で
は、当時の人々が使っていた農耕器具等を復元し
たものを使うことが出来る。敷地内には、当時の
稲作を体験できる水田もある。

汗をかいた後の出来たてビールは最高！

板付遺跡の見学後、バスに乗り、アサヒビール
博多工場へと向かった。板付遺跡からアサヒビ
ール博多工場までは直通のバスがないため、バス停
から徒歩で30分ほどかかる。気温は33度、日差
しは強烈で、その中を黙々と歩いた。もちろん汗を
かなりかいたが、見学後に出来たてビールを飲め
るということで、それを心の支えに何も飲まな
かった。見学後のビールの旨いこと。これは見学と
併せて無料で楽しむことができる。

これからのまちあそびは、参加者の皆さんがメ
ニューを考える仕組みに

まちあそびの会も4回目を迎えた。これまでは
よかネットが事務局を務め、あそびの企画、資料
準備や当日の先導などを務めていた。しかし今後
は、企画実行委員を立ち上げ、参加者がそれぞれ
アイデアを持ち寄り、新しい遊びを考えていくこ
とにした。企画実行メンバーを募った結果、10名
の方々から手が挙がった。

また、新しいまちあそびのアイデアを募集した
ところ、博多織、博多人形、博多包丁など、博多
の職人芸を訪ねるコースや、菅原道真公ゆかりの
場所を歩くコースなど、たくさんの案が寄せられ
た。

「退職して、時間の過ごし方、遊び方を模索し
ているので、その参考にしたいと思い、参加し
た」などといった意見も頂いたので、今後も、企
画実行メンバーの皆さんと一緒に様々な遊びを考
えていきたい。（はら けいすけ）

所内近況

パソコン災難に、福岡 大連・国際的ソフト化サー
ビス化システムが大活躍

【故障編】

「あなたは今どこにいるんですか」「大連で
す」「ええッ、やっぱりそんな気がしたんです
よ」「そうですか」「私は、大連には2～3回行

っていますよ」「そうですか」「そうゆう世の中になっているんだなー」。最初の言葉は私である。相手は30歳ぐらいかなと思う女性だった。

今年買ったばかりのパソコンの、メールのリターンが旨くいかないし、ウイルスについての警告が何度も出てくるので、事務所にあったウイルス対策ソフトを持って帰って入れてみた。翌日になると一層不具合になってきた。自分の手に負えないと思い、若い人に頼んで見てもらった。そのときの対応は、フリー（無料）のウイルス対策ソフトをダウンロードして対処するということだった。

ところが翌日になると、全く駄目になっていた。メールの受信はできるが「返信」を押すとフリーズする。wordを開いて一字でも打ち込むと固まってしまう。グーグルの検索文字を入れようとするとフリーズする。全く手に負えない。

8月4日の朝、意を決して、DELLの0120-というTELにかけてみた。自動応答の電話に答えている内に、女性の普通の応答に変わった。「どうされましたか」くらいから始まって、「機種を教えてください。表側に書かれています。裏側の記号も……」「パソコンにあるケーブルを、四つを残してははずしていただけますか」「?」「上部の○色の……」「はい四つだけ残っています」「それではF8を押してみてください。2分ぐらいかかるかも知れませんが」というようなことが続いた。その待ち時間の間に、上記のような話をしていたのである。言葉はきれいなのだが、カタカナ日本語のイントネーションが少し変だった。この文の冒頭に引用した“やっぱりそんな気がした”のネタは、少し変わった日本語だった。

その後、「なんか、インストールされていませんか」「はい、ウイルス対策ソフトをインストールしてもらいました。それがまずかったのでしょうか」「そのようです。ではもう一度F12を押してみてください」というような経過をたどって、「今回は引取に行って、無料で修理します。宅急便が取りに行きますから、パソコン本体だけを渡してください。十日間ぐらいかかりますが。明日の午後はどうですか」ということになり、2~30分の話が終わった。結局8月9日に宅急便が取りに来て、パソコンは12日に帰ってきた。

戻ってきたパソコンは、部品を取り替えたというメモがついていたが、全く直っていなかった。

また電話をしてみたら、今度は日本国内の男の人のような感じだった。いろいろ話をしたが「基本ソフトから入れ直さないといけないかも知れませんね。データが消える危険性はあるのですが」という状態である。「細かい手順を書いて送ってもいいですよ」といつてくれているので、また連絡を取るつもりでいる。とにかくそのまま“パソコン休憩中”が続いた。

【解決編】

メールをみることはできるが、全く入力できないまま、過ぎていった。19日にまたまた意を決して、事務所に出ないで0120に向かってみた。家にいることが少ないので、水撒き2時間、洗濯や宅急便などの来客等々があり、パソコンに向かったのは11時を過ぎていた。

機械的な対応が続き「このまま切らずに……」を聞きながら粘っていたら女性の対応が出てきた。「テクニカルサポートのアンと申します。どうぞなさいましたか。あなた様のパソコンを……」「○○」「直っていませんでしたか。……これは出荷時の状態に戻さねばならないかもしれませんね。必要なものはとっていただきましたか」というようなことが続き、「それでは今修理してしましましょう。すぐ直る仕組みになっていますから、ご一緒をお願いします」「簡単に戻せるような仕組みになっていますから、これからお願いします」「わかりました。よろしくをお願いします」ということで、ケーブルを4本以外はずして、「画面に○○がでましたら、トントントンとF0を押してください。変わりませんか」と続いたがうまくいかない。何か手順を踏んでF0を押すと、出荷時の状態に戻すソフトが組み込んであるらしい。「変わりませんか。これはパソコンを送り返した後で何かされたとき、ソフトが消えてしまったかもしれませんね」この辺で小生は「こりやダメかな」という気になる。

こちらの気分がわかったかのように「はじめからやっても簡単ですから、一緒にやりましょう」<一緒にといっても、大連と福岡は遠いですよ>と小生は思う。またまた○○がでましたらF0、次に がでたらF0を、という具合につづいた。「これから、読み取りが1時間ぐらい続きますから、一応次の手順をFAXでお送りします。もしできましたら、自分でやってみてください。できな

くてもかまいません。2時ぐらいに電話しますから、一緒にやれば簡単ですから。ではどうもありがとございました」といって、その電話は切れた。

こちらのFAXの調子が悪く、5枚の内3枚しか届かない。2時頃に電話がかかってきてその旨を告げると、またまた同じようなことが始まった。今度は2分ぐらいとか5分ぐらいとかの待ち時間があって、いろいろ聞いてみたいのだが、会話には「左様でございますか、申し訳ございません、どうもありがとうございます……」がつくので、“おあそびっばい”話は仕掛けにくい。一昔前のデパートのエレベーターガールの言葉を聞いているようだった。

しばらくやっていると、モニターの画像が急にシャープになった。そのあと、おしまい作業が続いてパソコンは回復した。20年前頃だったか「コンピュータ、ソフトなければただのハコ」といわれていたが、ソフトというものの正体を感じることができた。本当は、私の感じたようなものは、ソフトの門の脇の小石ぐらいなんだろう。それにしても、小石程度でも実感できてよかったと思う。とにかく、パソコンという機械(ハード)を売るのにこのサービスが付いているのである。終わるときに電話を見たら、52分と表示が出ていた。

電話が終わる前に「もう何かお聞きになりたいことはございませんでしょうか」といわれたので、一番聞きたいことを聞いた。「そこはデルのアジア全体の、あるいは他の機種も含めたサポートセンターですか」「いいえ」「デル日本だけですか」「そうです」ということだった。翌日には「その後問題はないか」というメールが届いた。

(糸乗 貞喜)

就農準備校で野菜づくりとネットワークづくり

8月下旬から福岡地区職業訓練協会なる団体が主催している就農準備校に通っている。5月に親元に帰った際、退職後は市民農園くらいやりたいと言っていた父が「55を過ぎたら体がきつくて、農業はもう無理だ」というのを聞いて、単純な私は“今のうちに始めなければ”と慌てて準備校の門をたたいた。

友人や知りあいのところで学ぼうかとも思ったが、気楽過ぎて途中でうやむやになるのもイヤだったし、準備校のホームページで“仕事を続けな

がら農業を学べる”という言葉に惹かれた。

毎週土曜日に300坪の農場での実習が12月まで16回ほどあって35,000円(2週に1回2時間ほど座学もある)。さぼるにはもったいないなと思うぐらいの金額なのも良かった。30人定員のところに今回は35名が参加。前期コース(4月~8月)の継続参加者が10数人ほどいて、仲良しグループになっている。私の年齢分布予想では、自分が最年少だろうと思っていたのだが、意外にも20~30代が10人くらいおり、カップルもいる(たぶん夫婦)。

女性も7人くらいいるし、おしゃれな格好でくる人や、いきなり地下足袋でくる強者や70歳を過ぎたじいさんもいたり、いろいろだ。毎回2人~3人ぐらいは、本格的に農業を始める人が出てくるようだ。

参加者のモチベーションが高いので、先生への質問が農作業中延々と続く。「鶏糞の量は坪当たり何グラムか?」などと、まるで料理のレシピを聞くような人もいた。作業中の雑談で「300坪の畑なら、直売所に年間通じて出せますよ。売上は100万ぐらいにしかありませんけど」という話が出ると、それまでクワを握っていた4人ぐらいが、さっとペンを取り出してメモを取っていたのには驚いた。また、私はそんな様子を話のネタにしようと写真に取るので、変な顔をされたりしている。

まだ2回なので、土づくりと種まきぐらいしかしていないが、前期の人が作ったピーマンやなすびの収穫もあるので、毎回楽しみがあっていい。ただネットワークづくりはまだまだなので、こちらにも力を入れていきたい。(本田 正明)

よかネット No.77 2005.9

(編集・発行)

(株)よかネット

〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町3番8号
福岡パールビル8階

TEL 092-283-2121 FAX 092-283-2128

http://www.yokanet.com

mail: info@yokanet.com

(ネットワーク会社)

(株)地域計画建築研究所

本社 京都事務所

TEL 075-221-5132

大阪事務所

TEL 06-6942-5732

東京事務所

TEL 042-501-2531

名古屋事務所

TEL 052-202-1411

(株)地域計画・名古屋